

公募の世界のスゴイ人たち

プロ志向か、趣味派か



イラスト マスリラ

公募マニア、公募フリーク、公募ファン……

要するに公募コンテストに参加し、創作活動をする人のこと。
その目的は、「プロになりたいから」「自己実現のため」「自分探し」
「書いたり、ものづくりをしたりすることが好き」「余暇活動として」
「おこづかい稼ぎのため」などいろいろですが、

大別すると、

公募を踏み台とし、プロの世界に出ていこうとする人
公募を趣味の場とし、この世界にとどまって楽しむ人
に分けられます。

もちろん、その中間派の人もいますが、

今特集では、前半でプロ志向の読者の方々（元読者を含む）を、
後半では趣味派に分類できる読者の方々を紹介します。

みなさんの先輩読者、大崎梢さんに聞く

プロへの道のりは 曲がり角の連続

ネットや公募ガイドを活用

——デビュー前、小説を書く勉強はされましたか？

その頃は書店員として働いていました。小説を書くことに興味はありましたが、書き方がわからなかったんです。そんなとき、家にパソコンが来たので、見よう見まねで小説を書いてみました。ちょうどニフティサーブで作品をアップして感想を語り合うフォーラムを見つけたので、出してみました。すると、作品の感想が聞けるのがすごく楽しくてハマってしまっただけです。そこで児童文学から始まり、ミステリーも書くようになりました。——いつ頃からプロを目指そうと。

ちに公募ガイドの存在を教えてください、賞に応募しはじめました。

——公募ガイドは活用できましたか？

その頃、講談社児童文学新人賞に、よしこれだ、と自信を持って応募したんです。選考結果が出そうな頃、そろそろじやないかと毎日電話を待っていました。でも連絡は来なくて、ものすごくがっかりしました。最終選考に残らない限り講評はもらえないので、何がいけなかったのかを知りたいと思いました。そこで、当時、作品添削講座で童話・児童文学を担当されていた石崎洋司先生の講座に落選作を出してみました。

——落ちた理由は判明しましたか？

判明しましたね。ミステリー作品だったんですが、犯人を途中で1、2回出さなきゃいけないのに、最初にちよこ、最後のほうでバタバタと出しちゃった。今思えば当時は当然のことに気がつかなかったんです。でも、石崎先生に「あなたはおそらくデビューできるでしょう」という言葉を頂いて励みになりました。——その後、デビューまでずっと書店員

を続けられていますね。

書店員を続けながら、作品を応募していました。どの公募もたいてい年1回なので、一度落ちると来年まで持ち越し。自分に合った賞を模索しながら出して、一年目で佳作を取っても次の年はダメだったり……。デビューへの道のりは曲がり角みたくです。あの角を曲がればきつとゴールだと思っても、また次の角がある。そうこうしているうちに、あつというまに5、6年がたった感じでした。——公募対策は立てて挑むほうですか？

受賞作品を読んで講評と照らし合わせたりはしましたね。自分とどう違うのか、賞の傾向やカラーも意識しました。続けているうちに、応募する賞もいくつかに絞られてきました。——デビューへのきっかけは何だったのでしょうか？

友人が、東京創元社の元編集長・戸川安巨さんがカルチャーセンターで講師をするから、出たほうがいいと強く勧めてくれたんです。この講座はすでに短編を書きあげているプロ作家志望者が対象でした。そこで、成風堂という書店を舞台にしたミステリーを持って受講したんです。その作品を戸川さんが読んでくれて、ほかに作品はないかと聞かれたので、すべて預けたんです。返事は半年か一年後だろうと思っていたら、翌週にはよい手



大崎梢（おおさき・こすえ）2006年『配達赤ずきん〜成風堂書店事件メモ』でデビュー。『晩夏に捧ぐ』『サイン会はいかが？』『平台がおまぢかね』『背表紙はうたう』ほか、児童書では『天才探偵 Sen』シリーズなど著書多数。'11年『スノーフレーク』が映画化され、幅広く活躍中。

ごたえが。そして『配達赤ずきん』成風堂書店事件メモ』として翌年出版されました。

作家になれて今でもうれしい

——同時期に他の賞にも応募された？

実は同じころ、ポプラ社の編集者が作品を読んでくれるという公募に応募していた、児童書でのデビューも決まりかけていました。それが、ミステリーのほうが先に出版されて、そのあとにポプラ社の作品が出たんです。公募生活を4、5年と決めて、芽が出なければ辞めようとして決めている方もいらっしゃいますが、私は結果的に書き始めてからデビューまで10年くらいかかりましたね。——とても幸運なデビューですね。



私は作家デビューにけっこう苦勞をしたので、なれただけで本当にうれしかったですね。最初はケラ（校正刷り）の記念写真まで撮ったんですよ。その気持ちは今も同じで、本が出るのも、読者からの感想も、編集者が声をかけてくれるのも、素直にうれしいんです。

——『配達赤ずきん』には書店時代の経験がふんだんに盛り込まれていますね。

書店を舞台に活躍する女の子の名探偵ってかわいいと思ったんです。それと、友だちに書店の話をすると、すごく面白がつてくれて評判がよかったです。

——デビュー後も複数の出版社から声がかかったとか。

文藝春秋と光文社と角川書店の編集者の方が書いてほしいと声をかけてくださったんです。新人賞でデビューしたわけ



『配達赤ずきん』
(創元推理文庫)



『スノーフレーク』
(角川文庫)

ではないので、作品を読んで本当に気に入ってくれた方が依頼してくださいました。それはかえってよかったと思います。——プロになって困ったことなどありましたか？

先輩がいないことですね。会社だと先輩を横で見ながら仕事を覚えますが、それができないんです。取材や新作の依頼への対応もケースバイケースです。作家はみなばらばらに活動しているので、自分の流儀が個性になるんです。同じ作家は要らないわけですから、それも当然ですが、最初ほとまどいがありました。

ミステリーは見せ方が重要

——その後、ミステリーと児童文学の両方を出版されています。書き分けは難しいのでしょうか。

難しくありませんが、ただ、児童向けのミステリーの場合は、書き方をやさしくする、わかりにくい伏線は削る、登場人物が今までの出来事を要約し、読者に思い出させるなど、技術的なコツはあります。

——ミステリーを書く上で見せ方は重要ですね。

同じ筋でもうまい人が書くのと下手な人が書くのでは、全然違う話になるんです。ちら見せや、いいところではぐらかす、予想の斜めをいく、忘れた頃に伏

線が回収される、そういう見せ方のうまさが必要ですね。あと、悔しくても編集さんの意見は受け入れたほうがいいですね。何回も書き直しをさせられたりしますが、悔しいことにその指摘が当たっていたりするんです。

——書店を舞台にした作品を多く書かれていますね、今後の作品の予定は？

『ミステリーズ！』で連載している本屋大賞を題材にした小説が近々出版予定です。作中では書店大賞になっていますが（笑）。書店大賞の一日をベースに成風堂シリーズの杏子と多絵ちゃん、そして業務日誌シリーズとして書いてきた出版社営業マン・井辻智紀が出てきて融合します。賞の実行委員の方から取材させていただいたので、本屋大賞の舞台裏を楽しんでいただけたらと思いますよ。

——デビューを目指す読者にメッセージをお願いします。

プロになると、年齢、学歴、職歴、取った賞も一切関係なくなります。作品がすべてで、出版社はその作家がどんなものを書くのか楽しみに待っています。それに応えるためにも「何が書きたいか」と聞かれたとき、ちゃんと答えられることが重要です。アイデアを伝え、第一稿を書いて初めて、編集者のアドバイスがきます。デビュー後にどういう作品を書く作家になるか、というビジョンまで持っているといいですね。

読者が受賞 3人にお聞きしました

あらい・ひろこ
2008年、第1回ポラスツ
コケ文学賞(大賞なしの優秀
賞)を『ナニワのMANZAIブ
リンセス』で受賞。東京都在住。



ポラスツコケ文学賞(優秀賞)

荒井寛子さん

——もともと作家志望で公募に挑戦されるようになったんですか。

いえ、最初は本当に趣味でした。ただ、『小さな童話大賞』を受賞する作品がすごく好きで、絶対一次通過者と

メフィスト賞

矢野龍王さん

——作家を目指したのは?

23歳のときです。高校生、大学生の頃は、漫画家を目指していましたが、自分には絵の才能はないと思い知らされて、社会人になるかならないかあたりで目指す方向を変えました。

——本誌を知ったのは?

して作品集の最後のページに載りたいと思っていました。4回目に佳作、翌年に審査員賞で山本洋子先生の賞に選んでいただいて、それから1年たってまた山本洋子賞をいただいたんです。それからですね、プロになりたいと思ったのは。

——書こうと思われたきっかけは?

公募ガイドが店頭に並んでいるのを見て、こんなに書いて応募するところがあるんだと思って。まず、5枚童話を中心に書き始めましたが、幼年童話に向いてないんじゃないかと思い始めて。それで江國香織さんがヤングアダルト的な作品で受賞した『小さな童話大賞』を目指すことにし、でも、そのうち『小さな童話大賞』が終わってしまったので、『ポラスツコケ文学賞』に向かっていきました。

——数ある公募ジャンルの中で、なぜ童話を?

絞りましたが、メフィスト賞だけで8回応募したはず。苦勞したのは、小説家になりたいという夢を、家族に理解してもらえなかったこと。小説を書いて遊んでいる暇があったら、もっと育児に参加して欲しいと言われてきました。

——2004年に第30回メフィスト賞を『極限推理クロスアム』で受賞し、デビュー。この作品は読売テレビで

子どもの頃からお話を作るのが好きだったんです。漫画を描いて、と言っても漫画は下手でふきだしばかりなんです。それをホッチキスで留めて一人で楽しんでいました。

——『作品添削講座』で勉強になったのはどういうことですか。

当時、講師だった石崎洋司先生には、とにかくキャラクターが書いてないと言われました。それから、主人公になりきって書かなければいけないのに、第三者的に外から見て書いているようなところがあって。石崎先生は、文章はうまいですねって言うてくださるんですけど、それは誉め言葉ではないんですね。作家になるにはそれだけではダメで、プラスアルファの部分が必要ですね。

——その後、石崎先生のあとを引き継いだ牧野節子先生に見てもらったのが受賞作『ナニワのMANZAIプリン

——デビュー以後はどのような生活だったでしょうか。

ごく普通のサラリーマン生活です。ふだんは会社員として働き、帰宅後や休日の余暇を創作活動に当てています。自分にとって創作活動はあくまで趣味です。皆さんが趣味で買い物に出かけたり、ゲームで遊んだりするのと同じように、僕は趣味で小説を楽しんでいます。

セス』ですね。牧野先生はお笑いがお好きですので、打ってつけでしたね。

漫才を題材にしていますので、主人公が漫才をし、教室は大爆笑というシーンがよくあるのですが、原稿にチェックが入っていて、「これで爆笑しますか?」とか。

——受賞したときはどうでしたか。

受賞のお知らせの電話では、何の話だろう? 嘘でしょって感じでしたね。それから、売れるのかしらって。それで、やっぱり書店に並んでいるのは見に行きました(笑)。

——これから書きたいものは?

中学生向きのものを書きたいですね。私は大阪で生まれ育って、中学2年で山口県に引っ越したんです。転校のわずらわしさとか、大人のいやらしさとか、そういう中学生特有のものを一番感じ取ったときのことを書きたいですね。

——作家志望の人にメッセージを。

メフィスト賞に7回応募して結果が出なかったもので、いったん小説家を志すことを諦めました。その後、2、3年ほど資格の勉強に没頭しました。ところが、あるとき久しぶりに小説を書きたくなったので応募したら、今度はすんなり受賞できたという経緯があります。焦らずに回り道をしたほうがよい結果が生まれることもあるようです。

公募が修業 本誌読者のスゴイ人



くりはら・みゆき
2012年、第27回家の光童話賞（優秀賞）を「木のぼりの木」で受賞。埼玉県在住。

家の光童話賞（優秀賞）

栗原美幸さん

——昨年、「家の光童話賞」の優秀賞を受賞しましたが、昔から童話を書かれていたのですか。

最初は童話ではなく、柏田道夫先生が連載している「実践シナリオ教室」

20数年来の付き合いになります。1990年には公募ガイドで知ったひとコマ漫画のコンテストに応募し、受賞しているのですが、そのときにはすでにお世話になっていました。

——デビューまでにどんな賞に応募しましたか。

推理小説に興味があったので、その系統の新人賞にはいろいろ応募しました。最終的にメフィスト賞に狙いを

ラマ化もされたようですが、周囲の反響はどうでしたでしょうか。

日頃はそういった話を一切しないので、僕が小説家になったことは誰も知りませんでした。僕の名前は実は本名なのですが、「同姓同名の小説家がいるみたいだ」と噂になったのは、だいぶあとになってからのことです。家族にはもともと伝えていたので、親父は僕の受賞をととても喜んでくれました。

（現「実践シナリオ・小説教室」です。ここに10年ぐらい投稿していました。

——「実践シナリオ教室」に応募したきっかけは？

たまたま本屋さんで公募ガイドを手にとり取って、面白そうと思って初めて出したのが優秀賞になったんですね。それで柏田先生から講評が届き、そこに「才能がある」と書かれていたので、うれしくて。

——よくシナリオが書けましたね。

大学のときに放送研究会にいて、ラジオドラマを書いていたことがあったんです。小さい頃の夢は漫画家でしたし、やっぱりお話を書くのが好きなんですよ。

——童話はいつから？

子どもができて童話に触れるようになって、童話に興味が出てきたんですね。それで3、4年ぐらい前から童話賞に応募するようになって、一度佳

——現在の目標はなんでしょうか。

最近、英語で小説を書いていきます。英語圏の人に読んでもらうためです。漫画に代表される日本の文化はクールジャパンと呼ばれ、注目されています。推理小説だって十分に海外で通用するはずという思いがあり、その先駆的な役割を果たしたいと考えています。困難な道のりなのはわかっていますが、だからこそ挑戦してみたいのです。

作に入りました。それから書いていたんですが、独学だと苦しくて、後藤

みわこ先生の「童話公募必勝講座」を受講しました。

——「童話公募必勝講座」を受講して勉強になったことは？

童話は子どもが読むものなので、後藤先生には、書いていることが抽象的すぎるとよく言われました。もつと子どもがわかるようにしつかり書きなさいって。先生は言葉のひとつひとつをすごく大事に見るんですよ。この言葉はこんなふうに使わないほうがいいとか。それで、一文一文をかなり丁寧に、どういうふうに見られているかを意識しながら書くようになりましたね。公募によって書くスタンスを変えなくちゃいけないのもわかってきましたし。

——賞によって傾向と対策があるわけですね。

あります。今回の受賞作も「家の光」

やの・りゅうお

2004年「極限推理コロシウム」で第30回メフィスト賞受賞。ほか、「箱の中の天国と地獄」「織姫バスルブレイク」など著書多数。東京都在住。



矢野龍王著
『極限推理コロシウム』
（講談社文庫）

が農業系の雑誌だったので、自然とかそういうほんわかした雰囲気、優しい童話が求められるんじゃないかと思って書きました。雑誌に載ると農家の人が読むので、ただ単に子ども向きというだけではだめだろうと。

——この作品は、自信作でした？

きれいできたなと思いました。子どもの幼稚園のことを書いたので、空想ではなく、リアリティーがあったのかなって。

——受賞は自信になりましたか。

なりましたね。1500名の中の人に選ばれたと思ったら、また書けるなって思いました。

——将来の夢は？

童話作家としてデビューすることでですね。デビューに直結した賞の受賞を目指し、出版できるようにしたいと思っています。小学校中学年、高学年が読むものを書いていきたいですね。

読者のみなさんを指導した講師かく語りき

プロになる人、受賞する作品は、ここが違う！



石崎洋司先生
(児童書作家)
担当 童話・児童文学
1回コース(元)

※石崎先生は、童話・児童文学1回コースにて、大崎梢さん、荒井寛子さんの作品を添削講評されました。

大崎梢さんの原稿を読んだ第一印象は、「きちんと考えて書いているな」でした。「そんなこと、あたりまえだろ」と、思われるかもしれませんが、実際はできていない人がほとんどです。大崎さんの原稿からは「これで読み手に伝わるだろうか」と、探りながら書いている節が感じられました。

ただ、当時書かれていた題材は大崎さん向きではなかった。これは多くの作家にあることです。ファンタジーを書きたかった作家が歴史小説で花開いた、などですね。デビューできる人は「意識が高い人」だと思います。たとえば文章。ひとつのシーンを描くには、情景、人物、心理それぞれを説明し、セリフを入れ、そして必要な伏線をはったりしますが、同じ文でも順番を入れ替えるだけで、印象、わかりやすさ、リーダビリティ、すべてが変わります。ただ書くことに必死になるのではなく、どれが最適の組み合わせなのかを試したり、既成作家の例を調べたりする。そこに時間をかける意識を持っている人は、短期間で自分のスタイルを見つけれられます。題材も同じです。アマチュアの方は「自分に向いている分野は××だ」とか、「いまの流行りは○○だ」と勝手にきめつけて、自分の視野を狭めていることが多いもの。「この題材とあの題材を組み合わせると、こういうこともできるのか」と、常に視野を広げる意識をもってると、意外な発見があるものです。



後藤みわこ先生(童話作家)
担当 はじめての童話講座
童話公募必勝講座

※後藤先生は、昨年、「童話公募必勝講座」で栗原美幸さんを指導されました。

栗原さんは、童話的な「引き出し」の豊かな方でした。当時の講評をまとめて読み返してみましたが、栗原さんの作品は、題材が実に「童話らしい」のです。自然に子どもの世界を描ける方という印象です。

読み返す過程で驚いたのは、栗原さんが見事に一か月一課題、六か月かけて講座を修了されていたことでした。落ち込んだり、ハイになったり……公募に挑戦していると気分はさまざまに変わってしまう。「統ける」って、言うほど簡単なことじゃありません。本当の意味でマイペースを守る書き手さんは強いと思います。プロになれるのは、諦めなかった人。ひと言でいえば「継続力」のある人でしょうか。思うように書けなくても、落選が続いても、書くことを楽しみ続けられる人にチャンスが来るのだと思います。受験なら志望校に合格すれば終わりますが、プロを目指して書くということは、その先(デビュー後)さらに書き続けるということ。ボツ、酷評、思うように売れない……そんなことがあっても、創作自体が楽しければ、投げ出さないでいられます。ただ……継続は大事ですが、「わたしはこのままでいい」と頑なに考え続けないこと。何度も落ちるなら、きつと理由があるはず。それを探せる目も欲しいです。AがダメならBを試そう、そんな柔軟性も作家になるために……そして作家であり続けるために、必要じゃないかと感じています。



牧野節子先生
(小説家・童話作家)
担当 童話・児童文学
1回コース(元)

※牧野先生は、童話・児童文学1回コースにて、荒井寛子さんのデビュー作を添削講評されました。

荒井寛子さんの「ナニワのMANZAIプリンセス」(応募時のタイトルは「ジャック&クイーン」)は、ジャック&クイーンという売れない漫才師を両親に持つ女の子が主人公で、その女の子も漫才をやることになるというストーリー展開。関西弁が活き活きとしていて、テンポもよく、楽しく読むことができた物語でした。ただ、作中の漫才のネタなど、甘い箇所も幾つかありましたので、それらについて指摘させていただいたことを思い出します。

私がアマチュア時代に通っていた創作教室の先生の、印象的なひと言があります。「安房直子は、二人はいらぬい」
「幻想的な作風の児童文学作家に似た作品を提出した受講生に対しての、ご指導の言葉でした。つまり、既存の作家の作品と似たものを書いていては、デビューはむずかしい、オリジナリティが大切だということですね。多くの出版物があるなかで、いままでのどんな作品ともまったく違ったものを書くというのは、たいへんなことに思えるかもしれません。でも目を凝らして探せば、まだ誰も手をつけていない「材料」はあるはず。」「二人」ではなく「ただ二人」だと思わせる、「その人ならではの「キラメキ」を放つ作品を書くことができる」と思えば、入選の可能性もデビューの可能性も、大いにあると思います。

後木砂男先生 (フリーライター・編集者)

担当 はじめての小説講座 / コツがわかる小説講座

新鮮な表現をしているもの。もってまわった言い回しがないもの。同一語、同一表現の多用がないもの。副詞や形容詞、またはその類いの表現がめったにないもの。文章と物語にリズムがあるもの。めりはりがあるもの。物語構成に整合性、論理性があるもの。出来事とその光景が脳裏にイメージできるもの。セリフの前後の文がト書きではないもの。思わずうなずいてしまうモノの見方。右の条件をすべて満たさなくてもいいし、満たすのはとても大変だから、一つだけあえてあげるとすれば、文章と物語にリズムがあるものになるかもしれません。いい作品には、優れた書き手には、それがなんとなくあるような感じがします。でもこれは先天的な資質ではなく、いい作品を大量にわきめもふらず咀嚼することによって獲得できるものだと思います。



柏田道夫先生 (劇作家・小説家)

担当 エンターテインメント小説講座 / 歴史・時代小説1回コース

最終選考を受け持った選者が、「もつとぶつとんだ作品を」といった要望を出すことがあります。これを鵜呑みにしないこと。どんなに破天荒な切り口や題材であっても、作品としての姿(体裁、ある程度のまとまり、違和感なく読める文章など)が整っていない作品は、初期審査ではねられます。誰も書いていない新しい何かがありつつも、読ませるための技術、文章力は不可欠です。受賞する作品はまずタイトルに力があることが多い。内容やジャンルをある程度感じさせ、引き(惹き)がある。冒頭の数枚できちんと情景が浮かび、主人公の姿が見えてくること。もちろん、扱っている題材ないし世界が新鮮(選者たちが知らない専門性が盛り込まれていた)り、切り方を感じさせる)ならば加点されます。

永井義男先生 (小説家)

担当 時代小説講座 / 50歳から始める小説講座



話題を時代小説にしほります。文学賞に応募してきますが、影響を受け過ぎて、「どこかで読んだような設定。類型的な主人公」になりがちです。もちろん、まったくのユニークさを出さずなど無理なのですが、どこかで一味違えなければなりません。さもないと、ありきたりの内容になってしまいます。一味、違えるだけでよいのです。もうひとつは時代考証です。時代考証をするのは大事なのですが、その勉強の成果をストーリー展開より優先して、ストレートに出してしまいがちです。「自分は勉強したのだ。知っているのだ」というわけですが、それはウンチクの披露でしかありません。時代考証の勉強の成果はさりげなく出すことが大切です。



藤咲あゆな先生 (小説家)

担当 ストーリーメーカー養成講座

新人の頃はよく新人賞の下読みをさせられていました。ライトノベルの場合は、ひとりにつき10〜20本預けられるのですが、その中に「これは！」と思う作品が1本でもあればいいほうです。これまでの下読み経験の中で、私は1本だけ「これはひよっとして受賞するかも」という作品にめぐりあいました。その作品がほかの作品と違っていた点は、原稿から伝わってきた「気迫」でしょうか。テンポも文章もうまく、何度も熟考したあとがうかがえました。数多くの出版された受賞作を読んでも思うことは、「作者の個性が感じられる」「これは今までになかったものだ」と思われる作品には、多くの人に読んでもらおうという「力」があるということです。

中田宗孝先生 (フリー編集者)

担当 小説基礎1回コース

この作品は最終選考までいくことができるのではないかと、ひよっとしたら受賞作になるのではないかとという予感のようなものを感じるのには読み始めてすぐのことです。新人賞の下読みをやっている人だったらだいたい同じようなことをいうはずですが、すでに文体ができてあがっている作品というのは、冒頭から文章に説得力があります。文体ができあがっているというのは句読点や改行のテンポを含めて、語り手の位置、語り手が語る言葉の方向性をはっきりしているということです。それが端的に出してしまうのが書き出しの部分です。書き手に迷いのようなものがあつて書き始めている場合、無意味な描写やモノローグのようなものが冒頭部分に長々と書かれていることがよくあります。このことはエンターテインメント系、純文学系を問わず共通していえることだと思います。



薄井ゆうじ先生 (小説家)

担当 作家デビューへの小説指南 (1回コース)

作品を一読して「この人は、いかには受賞できるかもしれない」と感じる場合があります。それを因数分解してみると、次のような要素を持っているのだと思います。①小説をたくさん読んでいて、小説の面白さを知っている。②誤字脱字がなく、文章には無駄がなく、必要なことはきちんと伝わるように書いてある。③その作品で何が書きたいのか、どう感動させるのかを知っていて、すべての文章がそこに向かって書かれている。逆に、受賞しないだろう人は、小説をあまり読んでいない。誤字脱字が多く、日本語としても稚拙。書いた動機に、恨みや憎しみ、虚栄心などを感じる。つまり極言すれば、小説に対して愛があるか、人間に対して優しさがあるかどうか、そこが分かれ道ではないかと思えます。

公募の世界のスゴイ人列伝

コツコツ派の応募マニア編

マニア対談 その1

坂井和代さんVS石井かおりさん

——公募を始めたきっかけは？

石井 賞金に釣られて(笑)。最初の応募は1992年。「公募ガイド」を買ったのが一番のきっかけです。初めての入選は新聞に投稿した俳句。長編ものは苦

手なので、手軽に始められるという理由から。俳句経験は一度もなかったです。

坂井 私も「公募ガイド」を見て。毎日家と会社の往復でつまらなさを感じていたとき、本屋さんで公募ガイドの創刊号が目にとまりました。

——毎年10回以上は入選を果たしているそうですが、思い出に残る賞は？

坂井 私は料理コンテスト。精進料理の店のバイト経験を活かしたゴマ豆腐風のムースや、郷土料理をアレンジしたれんこんの団子汁などで日本一にもなりました。全国のあらゆる料理コンテストに応募していたので、30代のときにテレビの制作会社から、料理研究家になりませ

んか。とスカウトされるほど夢中になっていました。公募ガイドの存在を知らずにいたら人生がつまらなかつたと思えますね。

石井 かなり前になりますが、中国国際放送局こと旧北京放送が公募した大連にまつわるエッセイが思い出に残っています。優勝賞品が大連のツアーで、ツアーに参加したのは私一人。行く先々で政府関係者につきそって、ちょっと前に日本で話題になった大物官僚の薄熙来氏とも会いました。

坂井 日本各地で行われる授賞式も楽しい。京都の偉いお坊さんに会えたり、よしもとの芸人さんが登場したり。受賞者同士で仲良くできて、今でも年賀状のやりとりをしている公募友達もいますよ。

——賞状はどう収納していますか？

石井 賞状の筒に入れて保管するくらいかな。捨てないで全部とってありますよ。

〈第1部〉
坂井和代さん
VS
石井かおりさん

〈第2部〉
清水和弘さん
VS
竹内祐司さん

坂井 筒はかさばるので、私は賞状用のファイルに収納します。筒はリサイクルショップが引き取ってくれるので、たまつたら売っちゃいます(笑)。

石井 なるほど！(笑)

——公募生活を長年続ける秘訣は？

坂井 10年日記を欠かさず書くこと。朝日新聞の人気投稿欄「ひととき」で、エッセイの達人の作品を読んで研究しています。

石井 私も朝日新聞は必ず毎日チェック。賞をとるには、時代を反映させた作品でないとうけないので。とくに日経新聞の経営者のインタビューや人気ランキングは参考になります。

——入選するために心がけていることはありますか？

石井 そもそも公募は「お金を産む」もののコンテストだと思っているんです。たとえば、地方自治体がキャラクターを募集しているなら、その地域にお金が流れる作品を求めているはず。これから街を盛り上げていこうという主催者の身に

なって、お金を産む作品をとことん考えます。

坂井 エッセイの場合ですが、「体言止め」を意識。コンパクトにまとめて、なおかつ余韻をもたせるためのテクニク。この技は、料理コンテストのレシピ作りで身についたものなんです。

石井 私はどちらかというと作品の芸術性よりも「職人技」を重視。自分の表現したいことよりも、主催者の求めるものを常に表現していきたいと思えますね。

——最後にこれからの夢を。

石井 公募に挑戦するようにしてから、ものを考えることのおもしろさを発見しました。お題を見ると燃えます(笑)。そんな公募生活を続けていくのが夢です。

坂井 私も同じ。親子3代7人家族の生活を大切にしながら公募生活を続けていきたい。憧れは「大草原の小さな家」の作者で、60代から小説を書き始めたローラ・インガルス・ワイルダー。いつか料理と旅行と家族愛をテーマにした小説を書き、文字賞に挑戦してみたいですね。

清水和弘さんVS竹内祐司さん

——毎月どのくらい投稿しますか？

清水 僕は、数打てば当たる方式。ですから月に500件です。川柳や新聞の時事コントは毎日10通くらいは投稿しています。公募の入選は数えるほどですが、雑誌や新聞の投稿の採用数なら誰にも負けない自信があります（笑）。

竹内 僕は300件くらいです。400文字詰め1枚のエッセイなら、だいたい10分くらいで書いてしまいます。

——お二人とも精力的に活動されていますね。これほど夢中になれる魅力とは？

清水 やっぱり、自分の意見が世間に発表できることですね。

竹内 会社で怒られたことや日常生活で失敗したこともネタにできるところ。なにより文章を書いている時間が楽しいですね。ストレス解消にもなります。

清水 公募を通して人間関係も広がりました。新聞などで私の投稿が気に入って



さかい・かずよ 昭和39年生まれ・石川県在住。7人家族の主婦。公募歴は約30年を誇り、エッセイ、川柳、アイデア、旅行プランが得意分野。30代までは主要な料理コンテストのほぼすべてに応募し、日本一のタイトルを3つ獲得。通算獲得賞金は約30年間で約400万円。公募チャンピオンの初代グランドチャンピオン。



本人直筆のイラスト

いしい・かおり 昭和36年生まれ・大分県在住。地元でリサイクルショップ「つねきち堂」を営む傍ら、公募生活を続けて約20年。毎月50件投稿し、入選は年間で約20回。年間の獲得賞金額は5万円以上。俳句や短歌、川柳などが得意ジャンルで、歴史上の人物で会ってみたい人は正岡子規、紀貫之、在原業平。



しみず・かずひろ 昭和27年生まれ・東京都在住。会社員。30代から始めた公募生活は30年以上。得意ジャンルは川柳、ネーミング、キャッチコピー。新聞の時事コント、雑誌にも精力的に投稿している。採用回数は、年間100件、通算獲得賞金は30年間で約600万円。公募の達人としてテレビや経済誌に取材された経験も。



たけうち・ゆうじ 昭和38年生まれ・愛知県在住。会社員。家族ネタをはじめ、時事ネタやテレビの感想などをつづったエッセイを雑誌や新聞に投稿して四半世紀近く。これまでの入選回数50回以上、通算獲得賞金は約300万円(月に1万円の賞金獲得として換算)。子供時代から文章を書くのが得意で、本屋が大好き。

それぞれの考えに合わせた作品を書くことですかね。

竹内 僕も清水さんと似ていますけど、自分の出した投稿を最初に読む人、たとえば雑誌なら編集者のこと、公募なら主催者のことを考えながら書いています。あとは池上彰さんの番組は必ずチェックしていますよ。ニュースではわからない時事ネタをわかりやすく解説してくれるので役に立ちます。また、これは僕の経験ですが、ネタは創作したものよりも、ドキュメンタリー（実話）のほうが採用される確率が高いと思います。

——お二人とも毎月たくさん投稿されていますが、ネタに困ることは？

清水 通勤電車での会話や出来事、家族の会話からヒントをもらいます。新聞も参考になりますね。

竹内 僕も家族から。カミサンのパート先の話や、20代の娘から今日一日の出来事を聞いて。カミサンの愚痴を聞く良きバ夫であり、娘との会話が絶えない良きパパです（笑）。

——公募生活は家族円満の秘訣になりそうですね。

清水 おかげさまで、19歳になる娘とは今でも仲良し。僕と同じく公募にハマっているんです。

竹内 そうですね。賞金をもらったら、まずは家族みんなで食事に出かけます。仕事の都合で授賞式に出席できなかったときには、両親に代理で行ってもらったこともあります。両親は思いがけず旅行ができたこと、二人ともすごく喜んでいました。

——公募生活の目標は？

竹内 家族そろって泊3日のドイツニールゾートツアーに行けるぐらいの賞金を獲得すること。オフィシャルホテルに泊まって、新幹線の往復チケット付きの豪華な旅を目指しています（笑）。

清水 サラリーマン川柳や防火標語など、メジャーなコンテンツに入選したいですね。なかでも、伊藤園の「おいしいお茶新俳句大賞」は娘がすでに入選しているの、父として負けてはいられません！

公募の世界のスゴイ人列伝

それぞれのジャンルの
スゴイ人編

青山昌代さん
西山雄貴さん
宮尾美明さん
久保隆さん
米恵美さん

エッセイ、コピー、絵画、作詞、漫画など、得意なジャンルで創作活動を続け、それを生きがいに行っている方々。ここではそんなスゴイ読者を紹介します。

親子で創作活動に励む

小さい頃から文章を書くことが大好きだったという青山さん。学生時代に本誌が創刊されると早速買い求め、即応募。

以来、「気づけば公募のために何かを書いている」という毎日。初受賞ではエッセイが1冊の本になり、青山さんの手元。「すぐくうれしかったです。受賞はもちろん、本としてかたちになったのはまた別の喜びでした。また、それを読んだ友人が『とても良かったよ』と褒めてくれたことで、さらに喜びが倍増したのを覚えています」

受賞の喜び、そして応募へのモチベーションは、こうした副賞によるところも大きいもの。「UCCコーヒー主催のエッセイでは、最優秀賞の副賞がジャマイカ・オーランドへのペア旅行。当時は独身だったので、親

365日、言葉漬けの毎日

「最初に公募に挑戦した頃は、10万円以上の賞金獲得を目指していました。なのに、キヤッチコピーのコンテストで高校生だった妹に10万円を先に取られてしまい……」

そんな経験が西山さんの公募魂に火をつけたそう。それから兄としての威厳を取り戻すべく熱心に取り組み、「オリックス学生キヤッチコピー」で最優秀賞（賞金30万円）を受賞。受賞時の興奮と言葉を考える楽しさが忘れられず、「さらに公募道に突き進んでいきました」

もともと印象深い受賞は、那須塩原市のウエディングヴィレッジのネーミング。施設がイタリアの小村をイメージしてつくられたことから、イタリア、花嫁、花言葉と連想。イタリアの国花ひなげし（花言葉は「純白」

午前は文章、午後は絵画

宮尾さんは国語教師でしたが、美術の授業を担当したことを機に36歳で美術大学に入学。そこで初めて絵を描き始め、49歳で『現代洋画精鋭選抜展』金賞を受賞。現代美術家協会の会員となり、プロとして活躍しながら、海外のコンクールを中心に金賞や銀賞など受賞歴を重ねていま

す。一方で、本業とも言える文章でも存分に力量を発揮。『ふるさと物語コンテスト』をはじめエッセイ、川柳、小説など各分野で受賞歴をもち、著書も4冊。自らが描いた絵を表紙にしたものもあるそうです。

退職した今年3月からは、午前中を文章の執筆、午後は絵の創作にあてる宮尾さん。スランプになったことはなく、「特に絵のほうはスタートが遅いのに」とん拍子で進んできたと思

歌は残る、誰かの胸に

高校時代はブラスバンド部で活躍、『NHKのど自慢』週チヤンピオンになった経験もある音楽好きの久保さん。初めての受賞は、助産施設のコササートテーマ曲の作曲賞。曲ができあがり、地元の混声合唱団によって披露されたときに、「自分が曲に込めた思いが人に伝わり、その人たちならではの表現をしてくれた」と大きな感動を覚えたと言います。

音楽を通して「心が通じ合う喜び」を知ってからは、作詞作曲はもはやライフワーク。『福山ニューPRソング』では作詞作曲でグランプリを受賞し、初めて著作がCD発売されました。『赤水歌』の歌詞コンペでは、最優秀賞を受賞した自作の詞にウィーン・フィルハーモニー管弦楽団首席バストロンボーン奏

一生公募にハマっていた

米さんの趣味はマンガを描くこと。友人から「何かに応募してみたら？」と言われ、本誌を紹介されたのが3年ほど前。そこに掲載されていた、自作の川柳にイラストを添えて送るという「川柳漫画コンクール」にピンと来て応募し、初めての応募にして大賞受賞。以来、漫画や川柳の分野で、何度も入選を果たしています。

米さんにとって受賞の喜びとは、表彰式に出席できること。審査員を務めた著名なマンガ家の先生方も出席されることが多く、たくさんの刺激を受けられるからだとか。これまででもっとも感慨深かったのは、『パタリロ！』などを生み出した魔夜峰央先生と会えたこと。「尊敬する先生とお会いして、



あおやま・まさよ。45歳、主婦。公募歴25年。応募対象はエッセイ、俳句、写真など。『UC Cグッドコーヒー スマイルキャンペーン』最優秀賞など通算獲得賞金128万円。

孝行を兼ねて母と旅行を楽しみました。ホテルセンチュリー静岡主催のラブレター募集では、グランプリを受賞。インベリアルスイートのディナー&朝食付き宿泊券をいただき、贅沢なひとときを過ごすことができました。中棚荘の初恋はがき大賞でも宿泊券をいただいて。ここは島崎藤村ゆかりのお宿で、素敵などところでしたよ。長野文学賞では賞金10万円。現金をいただいたのは初めてだったので、印象に残っています」

青山さんの今後の夢は「楽しく、そして長い文章での入賞」とのこと。

ちなみに青山さん、5歳の娘さんと親子で公募に励んでいるそう。すでに親子でダブル受賞を果たすなど娘さんも才能の片鱗を見せており、青山さんにとってもっとも身近で手ごわいライバルとなりつつあります。



にしま・ゆうき。28歳、コピーライター。『オリックス学生キャッチコピーコンテスト』最優秀賞、『グリコ×日経ビジネス ストレス川柳』大賞など、通算獲得賞金は約160万円。

「祝福」のほか、「結婚式の招待状」という意味も)にたどりつき、応募した「プラトリーナ」は9千作も集まった中で他の候補と重なることなく、審査員の満場一致で採用が決定、賞金100万円を手に入れました。

平日は仕事で、休日は公募のために、365日四六時中、言葉遣いの毎日を送る西山さん。「公募の創作では100%自分の発想、自分発信で言葉をつくれる。だから仕事とは違う感覚なんですよね」と楽しむ様子が伝わってきます。

夢はアニメや映画の原作となる賞をとること。そこから作家としてデビューし、仕事としてつなげていきたいそうです。西山さんにとって公募とは、いまや「夢を叶えるためのツール」。「必ずや成果を出したいと思えます!」と宣言する姿に、頼もしさを感じました。



みやお・みあき。68歳、元教師。『現代洋画精鋭選抜展』金賞、『ふるさと物語コンテスト』優秀賞、『もう一度会いたいノンフィクション』大賞など、通算獲得賞金は約450万円。

「絵を始めた頃は、励みになるものを必死で探しているような時期でした。だから、受賞したときは突然目の前が開けたような感じ」

さらに、公募は夢をつかむチャンスであり、「昔は歳をとることに抵抗がありました。今はこの歳でも夢にチャレンジできることが楽しい。何かに応募するときは、現在、過去、未来と自分の心のなかを行ったり来たりしながらテーマについて考えるんです。公募を通じて自分の人生を整理する作業も楽しいですね」と宮尾さんは、募集テーマに人生を詰め込む——公募のロマンを感じさせてくれるお話を聞かせてくれました。



くぼ・たかし。63歳、デザイン事務所経営。『福山ニューPRソング』グランプリ、『読売巨人軍創立70周年記念 新応援歌歌詞募集』佳作など、通算獲得賞金は約168万円。

者カール・ヤイトラー氏らにより曲が付けられ、「世界とつながった気がした」そうです。

久保さんは、ほか、プロ野球大編成の年と重なり、受賞がいつそう感慨深いものとなったという『読売巨人軍創立70周年記念 新応援歌歌詞募集』佳作など、数々の受賞歴を持ちます。

ちなみに、これまで手にしてきた賞金は手元には一切残っていないとのこと。行き先は奥様。作詞や作曲は時間も手間もかけてきたので、その償いだとか。「お金にとらわれると邪念が入って、いい創作に繋がらない」と久保さん。

モットーは「歌は残る。誰かの胸に」。

「これまでの経験があるからこそ僕にしかできない作品がある。これからも生涯現役で作詞作曲を続けていきますよ」



よね・よしえ。40歳、家事手伝い。公募歴は約3年。『長野・千曲市主催川柳漫画コンクール』大賞、『こいがたマンガ大賞』入賞、『佐賀まんが大賞』入賞などの入賞歴を持つ。

ゴッドハンドで握手もしていた。それぞれの作品に対するコメントもユーモアを交えて語られており、さすがでした。ただ緊張しすぎて、自分へのコメントはさっぱり覚えていないんです(笑)」

「公募は生活の楽しみ」と言いきる米さん。テーマについて考え、絵に描いていくこと自体がリフレッシュになるので、入賞にもこだわっていないし、落選してガッカリすることもありません。「アマチュアらしく自由にも、墓場に行くまで公募にハマっていたいですね」と、生涯公募宣言をしてくれました。

ただ、心配なのはスランプ。「ほら、カップルでも3年で倦怠期を迎えると言うやないですか。私も公募を始めて3年ほどなので、そろそろやないかと」

その声は、倦怠期やスランプとは無縁な明るいものでした。